書評

ルイ＝ジャン・カルヴェ，砂野幸稔訳『言語学と植民地主義：ことば喰い小論』三元社 2006年 280p 3200円

西山教行

人文科学には、人間精神の運動に従って自発的に形成された学問もあれば、社会や時代の要請に応じて構築された領域もある。言語学、民族学、そして言語教育学は19世紀以降の西洋による植民地主義の興隆とは切り離すことはできないのだが、言語学は長い間その出生の経緯から目をそむけてきた趣がある。

本書は、フランスを代表する社会言語学者カルヴェが1974年に刊行し、30余年を経て、翻訳されたもので、植民地主義と言語学の親和性を解明する。カルヴェは1942年に、当時フランスの保護領だったチュニジアに生まれたフランス人であり、北アフリカの多言語社会での経験を背景として、植民地主義に養われたフランス言語政策のアフリカにおける展開を批判的に考察する。全体は一般的理論を取り扱う第1部と事例研究の第2部から構成され、以下の11の章立てとなっている。

第1部 一般的諸問題、第1章 言語の理論と植民地主義、第2章 方言と言語 [国語]、第3章 言語における植民地化の過程、第4章 植民地支配の言語的痕跡、第5章 言語についての植民地主義的言説、第6章 言語と民族解放、第2部 個別事例研究、第7章 フランスにおける言語植民地主義、第8章 ラナルフ・ヒグデンとジョン・トレヴィザが伝える14世紀における英語の状況、第9章 バンバラ語、ジュラ語、マリンケ語の記数体系、第10章 バンバラ語におけるアラビア語とフランス語からの借用、第11章 アフリカにおけるフランス語

第1章は、フランス語の形成を歴史的に検証し、フランス語がその優位性をどのように正当化し、植民地主義と人種主義の言説に依拠しながら発展していったのかを解明する。その歴史的考察は、2章の「方言」と国語の対立構造の分析によって補完される。フランスは複数の地域語を国内に有する多言語社会であるが、フランス革命以降、共和主義の高まりから政府は「方言」（地域語）の撲滅を図った。フランス語を共和国の国語とするために「方言」を排除し、それらを被支配言語の地位に追い込んだのである。第3章は国内言語に対する植民地的支配の原理を明らかにしたことを受けて、国外に展開した19世紀のフランス植民地主義が異言語をどの

ように支配したのか、植民地における命名権に始まり、原住民教育を通じた言語支配、都市から農村への言語支配の拡大を論じ、植民地主義による言語支配の過程を解明する。第4章は植民地主義が言語にどのような具体的痕跡を残しうるか、借用語という現象に支配と被支配の力学を探る。言語に関する植民地言説を分析する第5章は、西欧文明の「言語」と植民地原住民の話す「方言」や「俚言（ジャルゴン）」を対峙するもので、植民地主義が文字を持たない言語をいかに断罪し、廃絶しようと企図してきたものを明らかにする。これは国内の「方言」に対する言語同化主義と同じ論理で進められた。理論研究の末尾は、植民地問題の根幹ともいえるべき、民族解放における言語の地位にあてられている。言語的解放なくして民族解放はあり得ないのか、あるいは独立後も旧宗主国の言語を活用することで、解放が可能なのか。カルヴェはこの問いに対して、宗主国の言語を放逐し、民族語の地位を高めることによってのみ、真の民族解放が可能であると主張する。この言説は、1974年当時マダガスカルやギニアで施行されていた言語政策を彷彿させるものだが、それぞれ異なる事情であるとはいえ、その後この二国がフランス語を教育言語とする言語政策に立ち戻ったことを思い起こすと、カルヴェの主張するような、民族語による教育、社会インフラの整備が一筋縄でいかないことがわかる。

第2部のケーススタディーは、フランス国内の言語同化主義、中世イギリスにおける英語の地位、西アフリカの民族語の書記問題、マリの民族語における借用の実体について、そして最後は新植民地主義的装置としてのフランコフォニーを論じる。

本書は、冷戦下にある世界情勢の中で書かれたものだけに、ソ連崩壊後の現代世界から見ると、新植民地主義からの政治経済的および言語文化的解放を基調とするカルヴェの主張はいささか色あせて見えるかもしれない。しかし、2004年にはコートジボワールで激しい反フランスデモが勃発し、2006年にはフランス語圏の一つルワンダが1994年の大虐殺との関連からフランスと国交を断絶するなど、新植民地主義は決して解消したわけではなく、国際情勢が錯綜し、民族問題が混迷する中で見えにくくなっているに他ならない。

これに比べると、国内言語同化主義をめぐる問題はあきらかに大きな変化を遂げている。フランス国内における地域語をめぐる言語同化主義という言説は明らかに後退し、地域語は市民権を獲得しつつある。また、フランス植民地主義におけるフランス語普及の実相についても、フランスによる一方的な「ことば喰い」で断罪で

きるほど事態は単純なものではなく、そこでは原住民との協働も明らかになりつつある。さらに、フランコフォニーがフランス語普及を通じたフランスの新植民地主義的策動から、グローバリゼーションのなかでアメリカに対抗する国際政治装置へと変質を遂げつつあることなど、本書の追求する課題は原著の刊行以降、大きく変化した。

しかしそれにもかかわらず、本書が現代日本社会に紹介される価値があるとすれば、それはカルヴェ自身が主著の一つと挙げているためだけではない。カルヴェの掲げる言語学の政治性という問題意識はその重要性を増すことはあっても、現在でもまったく意義を失っていない。言語を論ずることは優れて政治的営みであり、記述言語学においても政治的中立はあり得ない。本書の政治性についてみると、これ自体が言語政策の装置として機能し、カルヴェが研究対象としたアフリカ諸国では本書の戦闘的姿勢が高く評価され、新植民地主義告発の道具ともなった。

この一方で日本を見ると、カルヴェが掲げた言語に対する政治的まなごしは、アジアの旧植民地をめぐる言語文化研究において、ここ10数年重要な成果を上げてきている。しかし、西洋語研究に関わる私たちのまなごしには、カルヴェの提起する植民地世界からの照射が希薄に思えてならない。その点で、本書の刊行が、西洋語に関わる研究者に自省と深化の機会を与えることを期待している。

最後になるが、本書の訳者はアフリカの地域文化研究に関わり、南から北の世界を見据えている。ていねいな訳注はそれぞれ左頁にまとめられており、読書の助けとなる。

(京都大学)